TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

# 大学礼拝

WORSHIP SERVICE

## サマーカレッジ・秋季特別伝道礼拝特集号

CHAPEL NEWS

第106号 2008年10月
東北学院大学宗教部
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL (022) 264-6428

巻頭言

# 東北学院崩壊の危機

学長
星宮 望

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

（コリント人への手紙一　一〇章一三節）

東北学院は、今年、創立一二二年を迎えました。多くの先輩たちのご努力に感謝したいと思います。その中でも「東北学院崩壊の危機」を回避した特別の事態について学ぶ必要があると思います。このことについては、二〇〇八年三月二二日に開催された東北学院同窓会東京支部百周年祝賀会で支部長紺野稔氏（東京弁護士会所属）が挨拶として述べられたことであり、また、関連した事情について本学冊子『東北学院資料室』第七号（二〇〇七年一二月）に工学部鶴本勝夫教授が詳述しておられます。土樋ラーハウザー記念礼拝堂の地階にある展示品をご覧いただき、冊子『東北学院資料室』を入手していただきたいと思います。これらに加え『東北学院百年史』をも参考にして要点をまとめてみました。

時は、太平洋戦争末期の昭和十八年（一九四三年）です。日本の敗戦の兆しが濃厚となった十月十八日、東北軍管区司令官東海林俊成少将から東北学院に対し「東北学院は時局柄、不要不急の教育機関であるから、今年（昭和十八年）限り廃校とし、校舎は軍において接収する」との命令が出されました。当時、軍の命令は絶対であり、東北学院の廃校は決定的でした。そのときに立ち上がったのが、卒業生の萱場資郎氏でした。彼は、仙台市出身で、明治四十五年（一九一二年）四月に東北学院中学部へ入学し、第二代院長シュネーダー先生の薫陶を受け、卒業後、ハイテック軍需企業「萱場製作所」の経営者となっていました。当時の東北学院出村悌三郎院長は、急遽、萱場氏に相談することにしたのです。萱場氏は、陸海軍の機密兵器の特許を多数保有し、また、新兵器製造を盛んに実施するなど、軍にとって重要な人物であり、発言力があったのです。

この未曾有の危機に対し、同窓生萱場資郎氏の献身的努力が始まりました。

彼は、軍の横暴な命令を撤回させる方策を考えました。それは、当時必要だった航空技術学校に東北学院を転進させるということでした。具体的提案は「陸軍航空本部、海軍技術部は、東北学院航空工業専門学校の設立を支持する。萱場製作所仙台工場は学生の実習工場とする。よって、東北学院の廃校、校舎の接収は取りやめてもらいたい」というものでした。この要請の結果、廃校と接収の命令は撤回され、東北学院は、非常事態を免れることが出来たのです。「東北学院航空工業専門学校」開設にあたっては、東北帝国大学工学部長宮城音五郎教授の学校長兼務も決定されました。萱場製作所からの全面的援助を前提とした計画が策定され、専門学校の発足が推進されたのです。昭和十九年三月二十三～二十五日に入学試験を行い、四月の開学が決定されました。開学の目的は「本学は専門学校令の定むるところに依り、航空工業に従事すべき者に高等の学術技芸を授け、国家有用の人物を練成するをもって目的とす」でした。入学定員は、航空機科一〇〇名、発動機科五〇名、修業年限は三年です。このような涙ぐましい努力が功を奏し、隈部少将による軍管区司令官への進言もあって、東北学院の廃校命令は最終的に撤回されたのです。その後、皆さんご存知のように、日本は、ポツダム宣言を受諾し、昭和二十年八月十五日に無条件降伏をしました。「東北学院航空工業専門学校」は用を成さなくなり、同年九月十八日に「東北学院工業専門学校」と名称を変更し、大幅な学科改組を行ないました。

定員は、機械科七〇名、建築科七〇名、工業経営科六〇名でした。昭和二十二年三月にこの学校も廃止され、同年四月、新たに文経の専門学校が設置され、これが、昭和二十四年に発足した新制東北学院大学の始まりへとつながります。このような激動の事件、言い換えれば、「究極の試練」を経た後に、萱場氏は次のように述べたと伝えられています。「東北学院航空工業専門学校は二年、工業専門学校は一年と短命であったが、これが東北学院大学工学部創設の礎石となった。」

このような経緯と歴史をふまえて設立された東北学院大学工学部は、極めて重要な役割を担っていると認識しなければなりません。工学部の教員・職員はもとより、他学部の教員・職員も共有すべきことです。工学部が多賀城キャンパスにあることで、地理的に不利な条件を抱えているかもしれませんが、二〇〇八年以降、セントラル自動車や東京エレクトロン社などの宮城県進出が確定しています。まさに、イエス・キリストの教えを理解した高レベルの技術者が力を発揮するチャンスが巡ってきたのです。これらの企業では、技術者ばかりでなく、経済学、法学、文学、その他の広い分野で学んだ高レベルの大学卒業生の採用も予定されています。今こそ、東北学院大学の卒業生が活躍する場が備えられたと認識し、それにしっかり対応していただきたいと願っています。なお、萱場資郎氏の献身的な努力のことは、昭和四十六年五月十五日、東北学院八十五周年を記念する十五日会での講演において、ご本人から同窓生に対し初めて語られたということです。まさに、本日拝読しましたコリント人への手紙一の御言葉が実態的に受け止められたと思います。萱場資郎さんは「地の塩」の役割を果たされた先輩です。我々もその後を辿りたいと思います。

## ◆サマー・カレッジ【5ページ参照】◆

◆恒例の（?）ソフトボール◆

◆礼 拝◆

# 「みんなで生きる～命と向き合って」

社団法人
日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）
総主事
大江　浩

私の人生は、あの阪神大震災によって大きく変えられました。一分一秒が分けた「生と死」。死別・喪失体験から、人は何故死ぬのか？命とは？という問題が突きつけられました。

JOCSは、一九六〇年に創立されて（母団体は一九四九年に設立された日本キリスト者医科連盟）以来、開発途上国における保健医療協力を行っています。その原点は、一九三八年の日中戦争の時代に、ある牧師とキリスト者医学生を中心とした中国難民救済施療団が現地で活動したことに遡ります。JOCSの使命は「戦争に対する贖罪」であり、保健医療活動を通して平和を創り出していくことです。現在、五カ国八名のワーカー（医療従事者）を派遣し、七カ国九三名の奨学生支援を行っていますが、その一端をご紹介したいと思います。

第一にカンボジアです。諏訪ワーカー（看護師）は、母子保健活動が中心でしたが、今年二月から人身売買の犠牲者、性暴力やDV被害者の女性シェルターでの活動を開始しています。心も体も深く傷ついた女性達と共に泣き共に喜ぶことが重要な働きの一つです。

第二にネパールです。楢戸ワーカー（家庭医）がルクムという村で地域医療に従事しています。かつて十八年間活動し、「ネパールの赤ひげ」と呼ばれたドクター岩村の物語です。巡回診療の岐路途中で出会った重症の患者さんを一日背負ってくれた通りすがりの青年に、お礼をしようとしたら、その若者は「サンガイ・ジウネコ・ラギ（みんなで生きるために）」といって、お礼を受け取らずに立ち去ったそうです。支えあい助け合う世界があります。

ネパールは、病院へは患者は歩いて三日、患者を担いで五日～一週間かかりますし、絶対的な貧困がそこにあることは事実です。しかし「サンガイ・ジウネコ・ラギ」が示すように、共に生きる豊かさがあります。日本には余るほどの物の豊かさがあるけれど、人と人とのつながりの喪失という「関係性の貧困」がある。「本当の豊かさ」とは一体何でしょう？

第三にタンザニアです。清水ワーカー（助産師）は母子保健分野、特に命の誕生を支える活動に従事しています。しかし中には赤ちゃんのHIV母子感染やエイズ孤児、というシリアスな状況があります。清水ワーカーは出産介助をすると共に、地域に根ざした母子の健康やHIV／AIDSの予防啓発などの活動にも携わり、貧しい村々を回っています。

第四にバングラデシュです。バングラデシュへは、宮川ワーカー（内科医）に加え、同国マイメンシンにあるテゼ共同体が運営する障がい者コミュニティセンター（CCH）へ山内ワーカー（理学療法士）を派遣し、地域に根ざしたリハビリテーションと担い手となるスタッフの教育訓練を担っています。巡回リハビリではスラムの家庭も訪れます。最下層の人々が肩を寄せ合いながら暮らし、CCHのスタッフの「手」を待っています。

最後にもう一人、岩本ワーカー（看護師）のことをご紹介したいと思います。岩本ワーカーのミッションは、知的ハンディを持ったメンバーの家「プシュポ・ニール（華の家）」での活動です。そこには、ダッカの孤児院にいたストリートチルドレン五人も含まれています。路上で生活していた彼らは、親にごみのように捨てられ、『Nothing（無に等しい）』、そして『死んだ（も同然）存在』でした。しかし彼らはそこで再び、命を得ました。

JOCSの活動指針となる聖句は、「平和をつくり出す人々は幸いである」（マタイ：五―九）です。バングラデシュで出会った知的ハンディや身体的・精神的障がいを持つ子どもたちから、「平和をつくり出すのは、私たちではなく、その子どもたち一人ひとりの存在なのだ」と教えられました。ダッカに死んだに等しい形で捨てられていた孤児は、「イエス・キリスト」でした。「共に生きること」の意味について深く考えさせられます。

JOCSのキリスト教医療ミッションを柱とする団体である私達の活動地は、仏教（カンボジア）・イスラム教（バングラデシュとパキスタン）・ヒンズー教（ネパール）など非キリスト教国が主です。タンザニアの場合もカトリックを主としたキリスト教四割＋イスラム教四割＋伝統宗教三割という国です。

「私達は一体何者か？（キリスト者として）何ができるものか？」が常に問われています。現場では宗教や様々な違いを超えて、命が最優先される世界があることを、実感しています。

私達は「微力」かもしれないけれど、決して「無力」ではありません。ささやかな力であっても一人が二人になり、二人が三人へとつながったときに、何かを変える力を持つと思います。そのことを心に深く刻み、JOCSの草の根の人々の命と向き合う活動が、いつか平和に至るものと信じ、力を尽くしていきたいと思います。

◆大江 浩　氏

一九五七（昭和三二）年生まれ。一九七九（昭和五四）年関西学院大学文学部卒業。神戸YMCA、横浜YMCAを経て、二〇〇六（平成十八）年にJOCS（日本キリスト教海外医療協力会）総主事に就任し現在に至る。他に日本YMCA同盟国際協力委員、国際ボランティア学会理事などを務める。

大江氏には、十月八日（水）に多賀城キャンパス、土樋キャンパス（夜）の礼拝をご担当いただきました。

# 「何を如何に
## ―現場から見えてくるもの―」

ヘブライ人への手紙　第12章11節

社団法人
日本キリスト教海外医療協力会（ＪＯＣＳ）

元バングラデシュ
派遣ワーカー
宮川眞一

私の故郷は、愛媛県の宇和島である。宇和島藩は伊達の分家で、仙台とは、関係の深い土地柄でもある。その片田舎の教会学校に、当時ネパールで結核対策の事業に関わっておられたＪＯＣＳ派遣医師岩村昇氏が来られた。小学生の私は、氏が語った、山奥にすむ患者さんを何日もかけて患者をおぶって連れて来た青年が「みんなで生きるためですから」と謝礼を断った、という話しに深く感銘を受けた。ワーカーとなる三〇年前のことである。

高卒時、氏の語る海外医療に憧れ医学部進学を志すが数浪後、人生の再考察と「人の苦しみ」について考える場として神学部を選び進学した。在学中、現在の赴任地バングラデシュに初めて訪れ、悲惨な現実を目の当たりにし、技術を持って帰ってきたいと決心した。

最貧国の一つであるバングラデシュは人口密度が高く、今でも乳幼児や妊婦の出産に伴う死亡が、高い国である。任地のチャンドラゴーナ・キリスト教病院は、港湾都市チッタゴンから車で約一時間半、チッタゴン丘陵地帯と呼ばれる、先住民族が多く住み、宗教的にも政治的にも複雑な地域である。また、医療過疎が激しく、マラリアの陰湿地帯でもある。そこでの仕事は、病院の質を高め、七万人をカバーする地域に展開される地域医療のプロジェクトに参加することである。

現場ではトップダウンのシステム、死への意識の違いなど「文化の違い」からくる大きな壁が常に存在する。しかし、その根底にある「貧困」に基づく問題に直面する毎日に、光を見出すのは難しく、何度もくじけそうになる。そのような現場で、資金援助ではなく、「共に生きよう」とする姿勢を貫くことは、私のような普通の人間には大きな試練である。

脳性マラリアで死亡した患者の兄は「弟が治れば、自分は出家する」と語った。命や環境の不平等は、現場では絶えず突きつけられる。この不平等の改善に向け、病院では、保健ワーカーの育成、巡回医療チームの派遣を含んだプロジェクトが今、進められている。

聖書は、信仰者は試練の中にある時こそ、それに立ち向かう鍛錬が求められているのだと語る。試練・鍛錬は、結果を体験してから、後になって意味が理解できるものであるが故に当座には、誰しも避けたい。

使命感を感じ、あるいは夢を抱き進み続けようと思うなら、今の状況は「喜ばしくはないが」、神と共に働き続け、それに耐え鍛錬することで、先には必ず実りがやってくると信じたい。かつて岩村医師はこう語った。

「人が、少年や少女だった頃、抱いた夢の大きい小さいは問題ではない。それを、いつまで持ち続けるかが問題なのだ。」と。様々な試練の時にある大学生諸君に、是非覚えて欲しい言葉である。

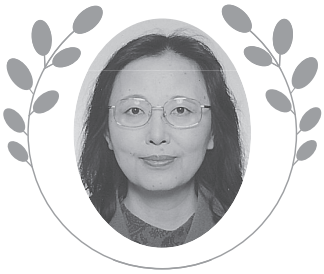
◆宮川眞一　氏

一九五九（昭和三四）年生まれ。一九八五（昭和六〇）年関西学院大学神学部卒業。一九九六（平成八）年徳島大学医学部卒業。一九九七（平成九）年より二〇〇四（平成十八）年まで福岡徳州会病院勤務。二〇〇五（平成十七）年ＪＯＣＳ（日本キリスト教海外医療協力会）に入職、バングラデシュ派遣ワーカー医師として赴任。三年に渡る現地での活動を終え、二〇〇八年九月に帰国。

宮川氏には十月八日（水）に泉キャンパス、九日（木）に土樋キャンパス（朝）の礼拝をご担当いただきました。

# サマーカレッジ報告

宗教主任 出村 みや子



今年のサマーカレッジは七月二十八日から三十日まで、雄大な自然の景色が広がる宮城蔵王ロイヤルホテルを会場として開催されました。参加者は教職員七名と学生十五名に、アメリカの音楽大学でヴァイオリンを学んでいるマーチー先生のお嬢さんがゲストとして加わり、ジャッキーさんのお陰で二日目の夜には、恒例となったマーチー先生親子のすばらしい「音楽の夕べ」を一同で堪能しました。今回は企画の立案から、開会礼拝や朝の祈り、レクレーション等、参加学生が積極的に協力してくれました。

今年のサマーカレッジは、昨年に引き続いて自然とキリスト教との関わりをテーマとして「聖書と自然」と設定しましたが、それは環境破壊の問題が深刻化しつつある世界の状況を反映して、日頃は勉学その他で忙しい日々を送っている学生と教職員が直に自然と触れ合うことで、私たちがこれからの人生において聖書に学びながら環境破壊や食の安全の問題と自覚的に取り組んでいただきたいという思いがあったからです。

一日目には山田乳業株式会社常務取締役の山田光彦氏をお迎えして、フロム蔵王アイランドにある山田牧場のかつて牛舎であった風格のある建物で、この地域の酪農と乳製品に関する講演と、実際にバター作り実習の指導をしていただきました。山田氏は参加学生山田小百合さんのお父様でありますが、お忙しい中関係資料を豊富に用意して下さり、明治十七年創業以来の山田乳業の歩みと、私たちの日常生活に欠くことのできない牛乳、バター、ヨーグルトといった乳製品の歴史や具体的な製法、牛乳や乳酸菌の健康効果について分かりやすく説明して下さいました。

バター作りの実習は、基本的にはペットボトルに生クリームと少量の水を入れて振り続けて固める作業ですが、徐々に腕が疲れ、（私を含めて）固まるまでにけっこう苦労した人が多かったので、出来上がったバターを丘の上のログハウスに持って行き、パンにつけて食べた新鮮な風味は格別でした。

## サマーカレッジ主題講演Ⅱ要旨

今回私は主題講演Ⅱとして「聖地アッシジと『聖地フランチェスコ伝』壁画」というテーマでお話し、最終日には聖フランチェスコの若き日の挫折と回心体験、托鉢教団設立の経緯を描いたフランコ・ゼフィレッリ監督の一九七二年公開の映画、BROTHER SUN, SISTER MOON を観ました。私が今年のサマーカレッジで聖フランチェスコを取り上げることになったきっかけは、参加学生の早坂優希さんが高校時代にこの映画と出会って感銘を受け、キリスト教を学ぼうと決めたということを聞いたからでした。フランチェスコの生き方は現代の若者に何らか訴える力があるのかもしれません。講演ではまず、かつて訪れたことのある聖地アッシジの美しい自然の風景の写真や、聖フランチェスコ聖堂の有名な壁画をパワーポイントで見ていただきながら、フランチェスコの歩みとその現代的意義についてお話しました。

裕福な織物商の息子として何不自由なく育てられたフランチェスコ（一一八二-一二二六）は、仲間と共に隣接するペルージア戦争に勇んで参加しますが、捕虜となってしまいます。病を得て帰郷し、それまでの価値観を揺さぶられた彼は、戦利品や高利貸しなどで大もうけをした父親と次第に対立するようになり、一切を捨てて福音に生きる決心をします。そして町外れのサン・ダミアーノ教会の壊れた会堂を再建するところから兄弟団の活動を開始するのです。当時十字軍の遠征の失敗や聖職者の堕落、貧者と富者の格差の増大、ハンセン病患者の問題が深刻さを増すなかで、清貧を尊び、托鉢を旨としながら経済的弱者や病者と共に生きようとしたフランチェスコらの運動は、ヨーロッパ世界に新しい修道制（托鉢修道会）の形態を導入することになりました。当初は人々の無理解にさらされ、妨害も受けましたが、一二〇年には教皇インノケンティウス三世から修道会としての認可を受けました。

「主よ、わたしをあなたの平和の道具としてください。憎しみのあるところに愛を、争いのあるところに赦しを、分裂のあるところに一致をもたらす者として下さい」

という印象的な言葉で始まる「平和の祈り」をどこかで耳にした方がおられることと思います。また大学礼拝で自然の美しさとその創造者なる神を讃える賛美歌七十五番の「ものみなこぞりて　みかみをたたえよ　ハレルヤ　ハレルヤ　光のもとなる　日を造りましし、みかみをたたえよ、ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ」（賛美歌二十一では二三三番）を歌ったことのある方、さらにジョットの有名な絵画「小鳥に説教するフランチェスコ」をどこかでご覧になった方も多いと思います。

有名な「平和の祈り」は残念ながらフランチェスコ自身の作ではありませんが、彼の愛と和解の精神をよく伝えている祈りとして世界中の多くの人々に愛唱されていますし、賛美歌のもととなった「太陽の賛歌」は人と自然との豊かな共生を教えています。また聖フランチェスコの「清貧の思想」はマザー・テレサの救貧活動にも大きな影響を与え、今日の格差社会の中で心に渇きを覚える人々の希望の源泉となっているのです。

◆ジョット作【小鳥に説教するフランチェスコ】

# 各キャンパスのメッセージ

## Izumi

**泉キャンパス**
大学宗教主任
**永井　義之**

**芭**蕉の教えを記した蕉門の弟子、土芳が絶景を前にしたときいかにして句を作るかという文章を残しています。短い文章の最後に「師、松島にて句なし。大切の事なり。」とあり、芭蕉が松島で句を読まなかったことを「大切な事」という。そして、芭蕉の言葉として、人は絶景を前にするといろいろな感興が湧いてきて句としてまとまらないものだが、そのような時には「心得」があるという。「見て取る所を心に留めて消さず、書き写して静かに句すべし」。あくまで俳聖芭蕉としては句を作るという目標に向かっています。しかし、実際はその芭蕉も松島では句を残さなかったということは、松島の絶景に心奪われていたのでしょうか。「心に留めて消さず、書き写して静かに句すべし」という言葉の「書き写す」は紙と筆でというのではなく、「心に留める」すなわち心に書き写すということなのではないだろうか。これを弟子土芳が「大切の事なり」と書き残したと思われます。

## Tagazyo

**多賀城キャンパス**
キリスト教学科
**佐々木　勝彦**

**今**日の「説教」は「面白かった」とか、「面白くなかった」と言うとき、皆さんは何を基準にしていますか。おそらく「自分とのつながり」を感じたかどうか、ということにこだわっているのではないでしょうか。

この楽しみ方は、実はきわめて初歩的なものにすぎません。もう少し深い楽しみ方があることを知っていますか。それは、あえて「自分とのつながり」を二番目にする方法です。「まず、なぜそのように語るのか」と、突き放して聞くのです。すると、その話の筋道がみえてきます。「ああ、そういう流れになっているのか」と分かってきます。

やがてあなたのうちに、余裕が生まれ、こう問いかけます。「あなたはそう言うけれども、少し違うのでは?」と。ここから「対話」が始まり、ついには、語り手に直接質問したくなるかもしれません。このときがチャンスです。トライしてみてください。

その行動は、まちがいなくあなたを造り変えます。

## Tsuchitoi

**土樋キャンパス**
大学宗教主任
**北　　博**

**秋**も深まって来ました。収穫の時期です。夏の間に太陽を浴びて育った農作物が、実りの時を迎えています。私の庭の小さな菜園からも、いろいろな野菜が採れました。先日、ある実験的な農園の稲刈りに参加して来ました。大勢の若者や子供達が、手に手に鎌を持って稲を刈ったり、わらで縛って木に掛けたりしていました。自然の恵み、そして人間が力を合わせて何かをすることの素晴らしさを実感できた一日でした。

ところで、収穫に至るまでには様々な苦労があります。種蒔き、水やり、雑草取り、消毒等等、毎日せっせと働かなければなりません。一度に全部やっても意味がありません。聖書を読む作業も、これと似たところがあります。一度に沢山乱読するより、毎日少しずつ読んでは考える方がより効果的なようです。そうは言っても、なかなか実行できないものですね。そこで、礼拝や聖研を利用するのも一つの手です。是非お試し下さい。

## ◆クリスマス礼拝のご案内

★第二十回泉キャンパスクリスマス
十二月五日（金）一八時三〇分～
泉キャンパス礼拝堂
第一部
礼　拝
説教者：日本基督教団 泉高森教会
清野　久貴　牧師
第二部
クリスマスコンサート
クリスマス・メドレー演奏、聖歌隊合唱、みんなで歌おう、キャンドルサービス、他

★大学クリスマス
泉キャンパス：十二月十日（水）
一四時三〇分～
土樋キャンパス：十二月十日（水）
一八時～
多賀城キャンパス：十二月十一日（木）
一四時三〇分～
説教者：東京神学大学教授
関川　泰寛　先生
オラトリオ「メサイア」合唱

★第五九回公開東北学院クリスマス
十二月十二日（金）一八時～
土樋キャンパス礼拝堂
説教者：日本バプテスト連盟
小松ケ丘教会
堀米　重次郎　牧師
オラトリオ「メサイア」合唱

## 編集後記

秋の特別伝道礼拝には多くの学生諸君が聞きに来てくれ喜んでおります。しかし特別礼拝や、クリスマス礼拝などの時には従来満席になって入場を制限せざるをえないときもありました。今回から、音声だけではありますが二〇番教室でも聞くことができるようになりました。約四〇名ほどの入場できなかった人たちも参加できました。いずれは映像も見られればと願っています。（NA）